

# 仙台陸軍墓地調査報告

Research Materials

佐藤憲一

## 1 調査日

現地調査 一九九七年二月七日  
聞き取り 一九九七年二月一九日

## 2 調査場所

現地調査 旧仙台陸軍墓地（現、仙台市青葉区小松島三丁目 常盤台霊苑）  
聞き取り 宮城県保健福祉部厚生援護課援護係

## 3 調査の結果分かった事

- ・仙台陸軍墓地は明治四年仙台鎮台の設置とともに、初め仙台市向山鹿落に置かれたが明治九年現在地に移転された。
- ・戦後は国の管理になっていたが、昭和二八年宮城県に無償譲渡され、現在は県有墓地「常盤台霊苑」となっている。
- ・現在の常盤台霊苑が旧陸軍墓地であることを知る人は地元でも少ない。郷土史家と言われる人でも知らない人が多かった。

- ・墓地は三五〇〇坪。その内約三分の一が墓地で、残り三分の二が公園となっている。
- ・墓地には墓が整然と並んでおり、大阪の景観と全く同じ（9頁、写真参照）。
- ・墓は兵卒・下士官・将校・軍夫など区分けされている。生兵の墓もあり。
- ・日露戦争で松山から仙台に移送され、収容中に病死した「露国陸軍列兵シヨーマリフキン」（明治三八年六月四日没）の墓がある。墓の形は日本兵に同じ。
- ・病死した兵士の墓が多い（次頁、「墓標に刻まれた死没の場所」参照）。
- ・墓石の形状、材質は大阪と全く同じ。大きさは兵卒の墓を実測したが大抵と同じであった（次頁、実測図参照）。
- ・兵卒の墓はほとんど明治期（明治一〇～四一年）のものか↓再調査の必要あり。
- ・墓地を管理しているのは、宮城県保健福祉部厚生援護課援護係。
- ・苑内は手入れが行き届き、清潔な印象を受けた。霊苑の清掃は県で

予算を組み、遺族会に委託している。遺族会では年四回苑内清掃を実施している。

#### 4 添付資料

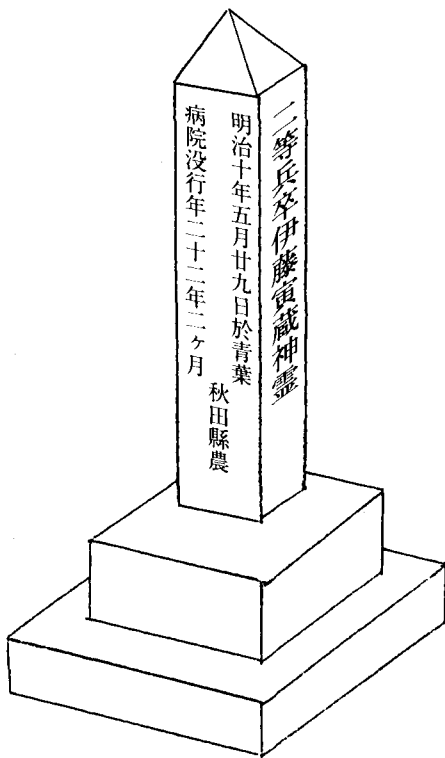
- ① 常盤台霊苑（旧陸軍墓地）の経過概要——沿革……………資料①
- ② 常盤台霊苑の由来碑文（昭和四四年三月）……………資料②
- ③ 常盤台霊苑現況図（平面図）——霊苑の規模、墓の配置・数……………資料③
- ④ 埋葬者名簿（遺族会作成）……………資料④
- ⑤ 墓地の写真

〔墓標に刻まれた死没の場所——参考〕

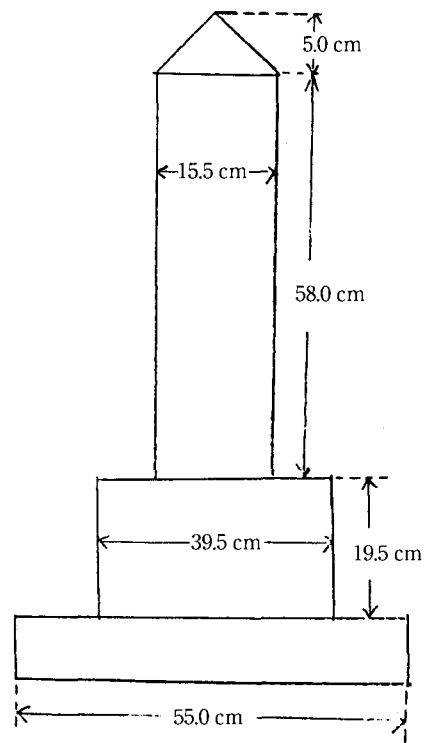
- ・ 鎮台囚獄に於て死没（明治一〇）
- ・ 仙台鎮台病院に於て病死（明治一〇）
- ・ 依病除隊、鎮台病院に於て病没（明治一一）
- ・ 歩兵第四聯隊病室に於て死す（明治一一）
- ・ 仙台病院に於て死す（明治一一）
- ・ 仙台鎮台囚獄に於て没（明治一二）
- ・ 仙台陸軍病院に於て没（明治一四）

（仙台市博物館、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇二年五月一〇日受理、二〇〇二年七月二日審査終了）



（兵卒墓標基本型）



（明治18年没二等兵卒の墓の大きさ）

〔墓の実測図〕

資料①

常盤台霊苑（旧陸軍墓地）の経過概要

陸軍墓地は、明治建軍以後の軍人で在営（在隊）中に死没した者を合葬（遺族には、その分骨を交付した）するため、明治天皇の特志により、陸軍省令をもって設けられた墓地であり、陸軍軍隊の衛戍地（軍隊の永久に駐屯する地）ごとに一か所設けられ、その他の高級部隊が管理することになっていた。その後従軍者の増加と戦闘の性格の変化等からして、戦死病没の軍人ばかりでなく、軍属をも合葬することとなった。

仙台にあつては、明治四年一月仙台鎮台が設置されるや、仙台市向山鹿落に仙台陸軍墓地を設け鎮台が管理していたが、明治八年に歩兵第四連隊が創設されて兵員が増加し、その後他の部隊が設置されるに至つたので、墓地の拡張を必要とするにいたり、鹿落の墓地より广大で数千坪あり、歩兵第四連隊に比較的近く、清浄で高燥かつ景観に富み、將來、仙台市発展の妨げとならないことを条件として実地検分の結果、現在の地に同年秋土地所有者（仙台市宮町居住の関氏）と相はかり、好意的な協力により、約三〇〇〇坪の土地を買収した。同九年三月頃から整地に着手、数か月にて整備（将校を上段向かって右側に、下士官は上段左側に、兵は下段に）を終わり、鎮台（第二師団司令部）が管理し、在営中または野戦で戦死、病没した軍人で、その遺族が当墓地に埋葬を願ひ出た者、または遺族不明で遺骨を引き取る者のない者を埋葬し、軍において供養を続けていた。鹿落の陸軍墓地は、廃止となり、昭和二五年七月墓地の改葬を完了した。

日露戦役凱旋後、松永師団長戦勝奉告の際、参道を拡張することとし、地元民より参道周辺の地を買収し、現在の敷地（三五〇〇坪）となった。その後、日清、日露両戦役従軍戦没勇士の霊を祀るため、その合葬碑を建立することとし、同四〇年三月一〇日竣工し、師団主催による

慰霊祭を盛大に挙行、次いで、満州事変に赫々たる武功を樹てて凱旋した第二師団は、事変の戦没者を合葬するため、満州事変碑を建立、昭和八年一〇月竣工、師団主催の慰霊祭を挙行した。

昭和一二年七月の日支事変勃発とともに、従軍者が激増し、戦没者もまた増加したので、弔祭は軍において執り行うこととされ、「陸軍墓地規則」を改め、戦没者は全部その分骨を陸軍墓地に埋葬することに定め、墓地内に納骨堂を建設（昭和一五年）し、収納した。終戦に伴い、旧陸軍は廃止され、連隊区司令部は各都道府県ごとに復員業務を担当することに定められたが、昭和二〇年一月一日宮城地方世話部と改称し、同二二年五月三日新憲法の施行とともに地方世話部は廃止され、都道府県庁民生部の機構に入り、その業務を継承することとなった。

陸軍墓地は、終戦に伴い一旦国有財産として大蔵省の所管となったが、その後国の独立とともに支那事変以後の戦没者を合葬することとなり、陸軍墓地の無償譲渡について申請し、昭和二八年一月一〇日、大蔵省指令第九八〇号により、認可され、県有墓地となった。

ここにおいて県（宮城県）は、支那事変以降、大東亜戦争戦没者の合葬碑を建立、陸軍墓地を「常盤台霊苑」と改め、昭和二八年一月二〇日県主催により、遺族、県民多数参列のもとに盛大に除幕式、慰霊祭を挙行した。その後、現在まで毎月二三日を月次祭として鎮霊の儀を行ない、また年一回慰霊祭を執行、感謝の誠を捧げている。

（宮城県援護課提供）

資料②

常盤台霊苑の由来

ここ常盤台霊苑はもとの陸軍墓地であり明治年間平時に病歿した第二師団将兵軍属の墓であった。後に日露戦争及び満州事変における戦歿勇士合葬の墓をそれぞれこの地に建立したのは当時世界列強の包囲と抑圧に耐えて我が民族の独立と生存を守り抜いた国民的心意気の発露であった。

昭和二十年八月大東亜戦争の敗戦と共に人心極度に昏迷し為にこの聖域は荒廃してこの戦争に殫れた勇士の遺品は仮の堂中に納められたまま永くその所に安んずることができなかった。

サンフランシスコ平和条約成り我が国独立の恢復と共に県民の総意は再びここに大東亜戦争戦歿勇士合葬の墓を建立し聖域を補修し昭和二十八年十一月これを完成したのである。

天守台の護国神社が戦歿英霊の神域であればここはその墓域である。その名も常盤台霊苑と改め不滅の遺芳を忍びつつ毎年毎月の祭りを絶やすことはない。

日本民族無窮の生命は古来敬神崇祖の伝統は輝くここに霊苑の由来を碑に刻んで永く後世に伝える所以である。  
昭和四十四年三月 文 島貫 常行

此碑寄進者

宮城県知事	山本壮一郎	同	佐々木照男	同	屋代文太郎
前宮城県知事	高橋進太郎	同	木村喜代助	同	荒井 律二
宮城県議会議員	佐藤民三郎	同	後藤 勝雄	同	佐々木源左衛門
同	浅野喜代治	同	高橋 正男	同	亘理 正彦
同	和田 鉄夫	同	小林 仁司	同	只木 和六
同	曾根 勲	同	鮎貝 盛益		
同	斉藤 惇	同	門間 正寿		
同	斉藤 栄夫	同	越路 玄太		
同	石母田文彦	同	庄司 隆		
同	阿部 蕃	同	阿部擧治郎		
同	西村千代子	同	村松 哲治		
同	斉藤 善平	同	遠藤 要		
同	佐藤常之助	同	木村幸四郎		
同	大宮 芳郎	同	平野 博		
同	桜井 亮英	同	菅原 忠実		
同	三塚 博	同	千葉松三郎		
同	武藤 洋一	同	高橋 大藏		
同	星 長治	同	門伝勝太郎		

(碑文表 原文のまま)

(碑文裏 原文のまま)



資料④ 埋葬者名簿 (遺族会作成 4枚組)

現況図中の①の区域

合葬之墓  
大東亞戦争戦没勇士

合葬之墓  
明治末年戦没  
戦死病没者

合葬之墓  
満洲亜要戦没勇士

田中末治  
陸軍中佐  
牛久保信  
陸軍中佐

田中末治  
陸軍中佐

竹下彌三郎  
陸軍中佐

渡邊孝  
陸軍中佐

下村啓介  
陸軍中佐

田中末治  
陸軍中佐

田中末治  
陸軍中佐

田中末治  
陸軍中佐

田中末治  
陸軍中佐

田中末治  
陸軍中佐

田中末治  
陸軍中佐

田中末治  
陸軍中佐

陸軍一等軍曹  
林 武治  
陸軍陸士下衣  
千原仙治  
陸軍一等軍曹  
加藤龍之助  
陸軍中佐  
宮野美太郎  
陸軍中佐

和泉元治  
陸軍中佐  
大崎元  
陸軍中佐  
坂本輝一  
陸軍中佐  
田中末治  
陸軍中佐  
田中末治  
陸軍中佐  
田中末治  
陸軍中佐



伊藤 愛蔵	遠藤 文治	藤原 由松	平田 孝郎	工藤 善郎	鈴木 文吉	大平 佐太	馬場 泰郎	糸川 高蔵	本村 弥蔵	佐藤 善三郎	大津 庄五郎	戸田 啓蔵	五十嵐 善三郎	山本 行三郎
子不 弥蔵	藤原 文治	林 栄蔵	富山 由松	近藤 丹次	深谷 留吉	尾山 岩吉	若松 菊蔵	松平 萬太郎	佐藤 利三郎	佐藤 平三郎	高松 庄五郎	穴澤 善吉	大木 善三郎	赤吉
小菅 善三郎	佐々木 敬助	稲打 庄五郎	吉田 勘蔵	信田 大光	今泉 善吉	下田 徳太郎	佐藤 巳治	浅利 直三郎	金澤 善三郎	長 正治	兵戸 謙輔	岡本 善三郎	佐藤 伊三郎	八島 三三郎
源 徳蔵	加納 巳治	佐藤 丹蔵	田代 留八	加藤 善蔵	吉川 留蔵	高橋 善蔵	中塚 栄吉	井浦 新助	高野 万作	山口 末三郎	寺坂 三郎	星野 善三郎	山田 房吉	徳成 善吉
東 亀蔵	黒瀬 勇治	熊野 善三郎	沼山 徳助	高橋 利吉	蓮藤 金平	大谷 善三郎	大下 千松	日野 新助	藤野 金吉	小崎 善吉	工藤 善三郎	佐藤 勘蔵	保科 茂助	宮地 智現
坂西 平吉	木村 芳吉	菊池 藏松	佐藤 善吉	前田 長吉	小野 善三郎	相馬 善三郎	伊藤 善三郎	小笠原 善三郎	荷坂 徳三郎	加藤 善三郎	橋本 樹吉	小林 善三郎	木村 芳吉	中村 雄蔵
遠藤 善三郎	佐藤 善三郎	上生 友吉	引地 仁三郎	伊藤 中松	木滑 善蔵	齋藤 善三郎	前川 文吉	高橋 善三郎	村上 善三郎	鈴木 善三郎	立花 善三郎	秋本 雄太	村川 利作	高橋 善吉
高橋 善三郎	長川 善三郎	工藤 善三郎	伊藤 善三郎	伊藤 善三郎	伊藤 善三郎	高橋 善三郎	山田 善三郎	藤田 善三郎	藤田 善三郎	三藤 善三郎	山崎 善三郎	岸 善三郎	新保 善三郎	熊谷 善三郎
木野 善三郎	藤田 善三郎	中村 善三郎	式田 善三郎	水沢 善三郎	齋藤 善三郎	沢田 善三郎	石田 善三郎	磯野 善三郎	平山 善三郎	加藤 善三郎	佐木 善三郎	鶴尾 善三郎	深瀬 善三郎	田口 善三郎
佐木 善三郎	高橋 善三郎	田村 善三郎	白幡 善三郎	上河 善三郎	石川 善三郎	伊藤 善三郎	伊藤 善三郎	成澤 善三郎	小川 善三郎	橋 善三郎	丹 善三郎	田中 善三郎	高橋 善三郎	山本 善三郎
合計 三三三	下段 三三三	左側 百三三	右側 百三三	上段 三三三	合計 三三三	阿部 善三郎	江口 善三郎	小橋 善三郎	菊池 善三郎	山本 善三郎	佐木 善三郎	関口 善三郎		

現況図中の③の区域



軍大 小林徳松	軍大 樋口一雄	軍大 森岡園藏	軍大 成田民介	軍大 荒川幸三郎	軍大 松尾善八	軍大 田村丈八
軍大 竹本喜太郎	軍大 相田源作	軍大 鈴木鐵藏	軍大 笠島忠太郎	軍大 矢野栄三郎	軍大 岩川俊次郎	軍大 中村芳
軍大 伊達忠太郎	軍大 清水七五郎	軍大 赤長藤四郎	軍大 野上善三郎	軍大 原 久七	軍大 八重野文治	軍大 袴田勝之助
陸軍 佐々木由松	陸軍 岡田清吉	陸軍 松田元吉	陸軍 田村源作	陸軍 早坂長治	軍大 中島定吉	陸軍 西郷元金 松野若生 松野若生
陸軍 岡分忠七	陸軍 中山吉藏					

現況図中の④の区域



旧仙台陸軍墓地  
(現在は常盤台霊苑)